英語ライティング・リスニングについて

【ご意見・ご要望】(投稿日:2024 年 3 月 5 日)

英語ライティング・リスニング(以下ライリス)について意見したいことがございます。率直に申し上げますと、現状では全く授業としての存在意義がない、と自分自身は感じております。理由としては以下の 4 つの点にあります。

1.アカデミック・エッセイを学部生の内に学ぶ必要性が希薄な点

ライリスの中で大きな割合を占めているのはアカデミック・エッセイの評価点です。しかしながら、学部生の内でこれを学ぶ必要性がほとんどありません。理由は単純で、学部生の大半が英語でエッセイを書く機会がこれ以降無いためです。(E1 などの授業は私は受けたことがございませんので、そちらの授業で絶対に必要だという場合は申し訳ありません。)A 学部においては英文学専攻が英語での卒業論文が義務付けられていますが、これは専門の特殊講義などで教員が教えれば済む話です。

2.まず大半の 1 年生がエッセイを書くレベルに到達していない。

一応、京都大学の英語の試験を突破した、ということでそれなりには英語力が備わっている人が多いのですが、それでもエッセイを書くほどの英語力を持っている人はほとんどいないと思います。私のクラスでも大半が Deepl などの翻訳ツールを用いて論文を書く程です。一体これに何の意味があるのでしょうか？加えて、そもそも日本語「でさえ」エッセイを書く能力は備わっていないでしょう、大学に入ってすぐなのですからちゃんと議論された、クオリティの高いエッセイを書けるわけがないのは当たり前ではないでしょうか、そもそもほとんど全員が情報を収集する能力ややる気すらないでしょう。(私のクラスの教員はレポートのクオリティは評価対象外と仰っていましたが、それはそれでどうかと思います。)

3.担当教員による格差

はっきり言ってこれはかなり深刻な問題だと思います。私は A 学部の 4 組ですが、前期後期ともに厳しい教員が当てられ、かなり大変でした。特に後期では 550 語のエッセイと 1000 語のエッセイの 2 つを提出しなければならなかったです。しかし、聞くところによると A 学部 1 組は二回分合わせて 1000 語と明らかに楽な課題で、衝撃を受けました。B 学部の 1 組では、授業に 10 回欠席した者が居るにも関わらず、単位が取得できた、という人までおり、はっきり言って滅茶苦茶です。厳しい代わりに大変意義のある授業だ、というのならまだ理解は出来ますが、先ほど申したようにこの授業の存在意義は全くないと考えているので本当にただただ不平等でしかありません。

4 ライティング・「リスニング」という名前にも関わらず、リスニングの比重が少なめ

京都大学は入学試験にリスニングが課されないため、リスニング能力の低い生徒が多いで

す。言語の四技能、RLWS において最も重要と呼べるのがリスニングです。にも関わらず gorilla とリスニングテスト以外でリスニングの訓練は行わない、というのはいくら何でも少なすぎる上、聴けるのは一週間とリスニングテスト前のみ、リスニング音声のスクリプトすら配布しない、というのは生徒に勉強させる気があるのでしょうか。

以上です。京都大学は仮にも日本で 2 番目に位置する大学なのですから、世界を相手にする人材を育てようとしたいのなら、しっかりとした英語教育を施すべきで、このような必修にあたる授業は特に見直すべきだと思います。

【回答】(回答日:2024 年 4 月 4 日)
(回答部署:国際高等教育院共通教育教務掛)

ご意見をありがとうございます。

英語での論文執筆の技能は、学部生のうちに身に着ける必要な英語技能のひとつとして位置付け、全学共通科目として提供しております。1年生の段階で、現在のご自身の専門とは関係がないように感じられても、これから学問・研究を深めるために、(あるいは、社会の様々な分野で活躍するために、)しっかりとした基礎が確立されている必要がある、大切な技能です。

教員がエッセイのクオリティは評価対象外と申し上げたのは、おそらく、アカデミックライティングのスキルという観点からは、授業のなかで教授した論理的な英文の基本構造に則してエッセイを執筆することが重要であることを伝えたかったからであり、もちろん、その内容が学術的に素晴らしいのであれば、それに越したことはありません。

クラスの担当教員による格差についてのご意見もありがとうございました。授業の到達目標については、どのクラスも同じ目標を持っておりますので、それに向けて専門の教員と語学教員がチームになって意見(情報)交換を行いながら授業進行を行っています。評価方法についても同様です。

授業におけるリスニングの比重について、ご指摘のように GORILLA の 13 のユニット、及び 4 回の授業内リスニングテストで構成されております。各ユニットの学習期間は一週間となっていますが、画面上に表示されている「復習用」というコースに進んでいただくと、学習期間完了後のユニットを何度でも聞き返すことができます。GORILLA にはこのユニットのほかにもさらにリスニング能力を高めるための Extra practice for further study があります。GORILLA の前期教材は、『京大・学術語彙データベース基本英単語 1110』の Part Ⅰの語彙を多く使っていますから、その語彙集を徹底的に勉強することにより、リスニング課題にも対応しやすくなります。

また、国際高等教育院の英語教育部門のウェブページでは、「英語音声の特徴」(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/soundfeatures)、「英語リスニング力を向上させるために」(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/tips/contents_jp#frame-322)、「リスニングについての FAQ」(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/consultation_jp_FAQ#frame-493)のページでリスニングの自学自習を支援しています。そして、「自律的英語ユーザーへのインタビュー」(https://www.i-arrc.k.kyoto-u.ac.jp/english/interviews_jp)ではリスニングに限らずさまざまな英語学習法を紹介しています。加えて、1 回生後期からは E3 科目の「アクティブリスニング」を受講してリスニング力を鍛えることもできます。リスニング学習についての疑問点などがあれば、国際高等教育院棟 2 階カンバセーションルーム1にて昼休みに実施しているオフィスアワーにお越しください(ただし実施曜日は学期によって異なりますのであらかじめご確認ください)。また、課外教育の一環の中で留学生と言語交流を行うプログラム等を行っています(https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/facilities/campus/kizuna)。これらの機会も活用して、リスニング技能を含めた四技能を高めることを期待しています。